

## メソディスト系分派と民衆的宗教世界

### —プリミティブ・メソディストと バイブル・クリスチャンズを事例として—

山中 弘

#### I はじめに

教会史ないし神学思想史とはやや異なった視角から、もう一つの近代イギリス宗教史の描きかたを示してくれたのが、キース・トーマスの古典的名著『宗教と魔術の衰退』であったように思う<sup>1</sup>。彼は、当時の膨大な資料を駆使しながら、17世紀前半までのイギリスの宗教状況が制度的なキリスト教一色に塗りつぶされていたわけではなく、その周辺には、魔女や亡霊や占星術など実に様々で雑多な信仰や儀礼が存在していたことを明らかにしてくれた。彼の著作を通じて、われわれは教会史やエリートの神学的営みの背景に隠れてしまいがちな当時の民衆の生きた宗教世界を垣間見ることができ、彼の労作によって、ともすると平板な記述になってしまうこの時期の宗教史がにわかには立体的な姿をとって立ち現れてくるのを感じることができたのである。

しかし、トーマスは、この著作で、これら民衆的宗教世界の存在に新たな光を投げかけただけでなく、それら「魔術」が時代を経るにしたがって「衰退」していったこともあわせて明らかにしている。つまり、彼の関心は、ウ

ェーバー的に言えば、「呪術の園」で微睡んでいた民衆の近代的心性への目覚めという一つの歴史的過程を、民衆宗教史という観点から記述しようとしたといえなくもないのである。その際、彼は、その覚醒を促した理由として、17世紀の科学・哲学革命、都市生活の成長、人間を取り巻く環境の統制の増大に伴う不安感の大幅な減少とともに、人々の精神的変化、つまり、「人間の独創力の可能性を信ずる新しい姿勢」の誕生を指摘している<sup>2</sup>。彼は、いかにも歴史家らしく、魔術の衰退の最も中心的な理由が何であったのかをはっきりと断定してはいないが、「超自然的な助け」よりも「人間の能力を信ずる」という新たな態度の出現を重視しているように思われる。

確かに、ピーター・バークが指摘するように、宗教的世界を含めたヨーロッパ全体の民衆文化の変容は、プロテスタント地域と都市化の進んだ地域では17世紀後半までに起こっており<sup>3</sup>、イギリスの宗教状況の変化に対するトーマスの記述もこれと軌を一にしているように思われる。しかし、ここで私が注目したいのは、彼が自助のイデオロギーの普及を始めとした魔術の衰退に与る様々な要因を挙げた後で、こうした趨勢がイギリスのどの地域でも一様であったわけではなく、19世紀になっても、田舎に住んでいる一般民衆にとって魔術は依然として意味のあるものであったと指摘していることである<sup>4</sup>。つまり、この新しい態度は何よりも知識人、都市に住む中産階級の間で最初に生じた可能性が高く、都市部から離れた農業地帯や辺境の地域に住む一般民衆の世界では状況は異なっていたかもしれないというのである。そもそも、トーマスが筆をおいた18世紀以降において、民衆の宗教的世界に圧倒的な影響力をもつことになったメソディズムの存在を考慮するならば、その世界においてむしろ「超自然的助け」への信頼は活性化しているようにみえる。実際、ウェスレー自身、その『日誌』において、当時の知識人の常識に反して、魔女の存在の真実性をはっきりと主張しており、こうした考え方に即して、自ら創刊した『アルミニアン・マガジン』誌にも、魔女や亡霊な

<sup>2</sup> Ibid., p.797.

<sup>3</sup> Peter Burke, *Popular Culture in Early Modern Europe* (Hampshire: Wildwood House, 1988 rep.), p.235. 中村賢二郎他訳『ヨーロッパの民衆文化』(人文書院、1988年)、308頁

<sup>4</sup> Thomas. op.cit., p. 798.

<sup>1</sup> Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (Middlesex: Penguin Books, 1980 rep.). 荒木正純訳『宗教と魔術の衰退』上・下(法政大学出版局、1993年)

どの超自然的世界の存在に関わる逸話をいくつも掲載している<sup>5</sup>。もちろん、私はここからメソヂズムが古い魔術を温存したのだと主張したいわけではない。ただ、超自然的助けから人間の能力への信頼という精神的变化の道筋において、トーマスの主張が与える印象よりも、古い魔術の衰退はより錯綜した運命をたどったのではないかと考えるのである。とりわけ、本稿で取り上げる 19 世紀の農村地帯で勢力を拡大した分派集団の活動のなかには、「人間の独創力の可能性を信ずる新しい姿勢」に通底する態度が古い魔術を含めた超自然的なものへの信仰と矛盾することなく存在しているという側面が認められ、その態度を支えた彼らの神への信仰が、最終的に古い魔術の内実を空洞化しつつ、それへの自発的な決別を民衆的世界の内側から生み出していたようにもみえるのである。本稿は、民衆宗教史という視点から、19 世紀初頭に誕生したメソヂズムの二つの分派の初期の宗教世界に焦点を当てることで、トーマスが描き出した道筋とは違った、民衆の呪術の園からの離脱のあり方の一つの可能性を示してみたいと思っている。まずは、ここで論じる二つの分派の特徴とその指導者たちのプロフィールについて簡単にみてみることにしよう。

## II 二つの分派とその指導者たち

### (1) プリミティブ・メソヂストとバイブル・クリスチャンズ

一般に、イギリスにおいてウェスレーの死後数多く誕生したメソヂズム系諸派は、リバイバリズムを契機にして母体組織から「分派」したものと、組織運営をめぐるそこから「離脱」したものとに大別されるが、前者の代表的な存在が、ここで取り上げるプリミティブ・メソヂストとバイブル・クリスチャンズである<sup>6</sup>。1812 年にスタフォードシャーで誕生した前者と、それより 3 年ほど遅れて、デヴォンシャーで誕生した後者は、ともにメソヂス

トの地方説教者層をリーダーにして形成され、規律の強化を志向した当時の母体組織との葛藤を経験しながら、最終的には自立的な教派として発展した。なかでも、プリミティブ・メソヂストは母体組織と信者を二分するほどの大規模な教団に成長したが、20 世紀におけるメソヂズム諸派の合同の動きのなかで両派とも姿を消し、今日では存在しない歴史上の教団となった。

これら二つの教派の特徴は、ともにリバイバリズムを基盤にして成立したという点だけではなく、多くの側面によく似ている。例えば、大声をはり上げての夜を徹した祈祷会や賛美歌の合唱などの礼拝の仕方やその雰囲気などから、一般にネガティブな意味合いをもつ「ランターズ（騒々しい人々）」と呼称されたこと、その信者たちが農業労働者、炭鉱労働者など、全般に低い社会階層に属する人々であったこと、ウェスレー死後の母体組織において禁じられた女性の説教者たちを積極的に採用したこと、さらに、禁酒運動に熱心に取り組んだことなど、両者の間には数多くの類似点が指摘できるのである。

これら二つの分派については、それほど研究があるわけではない。とりわけ、バイブル・クリスチャンズは、信徒数が 3 万ほどと少なく、その勢力範囲もデヴォンシャーとコンウォールに限定されており、メソヂストの教会史家を除けば、これまでほとんど注目されてこなかったいわば忘れられた教団といえよう。これに対して、プリミティブ・メソヂストの方は、教会史家以外にも社会史などの観点からの諸研究が少なからず発表されている<sup>7</sup>。とりわけ、産業革命期の労働者階級と宗教との関係を考える場合に必ず言及される宗派となっており、著名なマルクス主義者 E・ホブスボームはこの教派に「労働宗派」という名称を与えている<sup>8</sup>。これは、この教派の信徒のなかの一部が農場や鉱山で起こった労働争議に重要な役割を果たしていたり、後年の労働組合運動と関係をもっていたことなどに由来している。しかし、こうした社会史家たちからの注目は、かえってこれらの宗派を宗教的外皮を被った民衆の抵抗運動といった政治・社会的パースペクティブだけに押し込め

<sup>5</sup> 山中弘「ジョン・ウェスレーと民衆的宗教世界」『哲学・思想論叢』(筑波大学哲学思想学会)、1995 年、第 13 号、4-6、9-11 頁

<sup>6</sup> Robert Currie, *Methodism divided: A Study in the Sociology of Ecumenicalism*, (Faber and Faber, 1986), pp. 54-55.

<sup>7</sup> その代表的なものとして以下のものがある。Robert Moore, *Pitmen and Preachers and Politics* (Cambridge University Press, 1974)

<sup>8</sup> Eric J. Hobsbawm, *Primitive Rebels* (Manchester University Press, 1959), pp. 135-142. 水田洋他訳『素朴な反逆者たち』(社会思想社、1989 年)、259-276 頁

てしまい、それらがまさに宗教として民衆宗教史においてもっていた意味を不問に付してしまいがちなことも忘れてはならないように思う。

## (2) ヒュー・ボーンとウィリアム・オブライアン

さて、19世紀初頭に誕生したこれら二つの分派の指導者たちは、ウェスレーのような聖職者ではない。彼らは、当時の支配階級の一角を占めていた国教会の聖職者というエリート階層に属していたわけではなく、生活の糧を得るために一般の職業に携わっていたごく普通の人々であった。こうした人々の出現を、トーマスの描いた17世紀の民衆的宗教世界に重ね合わせてみると、宗教史においてそれがもっていた重要な意味が明らかになってくる。周知のように、17世紀までのイギリスの宗教状況において、ピューリタン革命期の社会的混乱の時期を除けば、国教会に属す一般民衆はおおむね宗教の受動的な享受者に過ぎなかった。彼らは、洗礼、結婚、死亡などの人生儀礼の折りに教区教会に姿を現すものの、それ以外の時には雑多な魔術のお世話になりながら、人生の浮き沈みを何とかやり過ごしていたといっている。しかし、18世紀に入って国教会体制の機能不全と相まって出現する信仰復興運動の波は、一般民衆の間に、聖職者の話を唯々諾々として受け入れる受動的な従来の態度を否定し、能動的かつ自発的に自らの意志で伝道活動に身を捧げる人々を数多く出現させることになった。

こうしたことが大衆規模で起こることを可能にした社会的背景は、いうまでもなく、産業革命によって古い宗教秩序を支えていた共同体が解体し、人々の移動を含めて様々な資源が流動化したからに他ならない。宗教史的には、これら大規模な社会変動を通じて、伝統的な宗教構造が根本的に再編されることになったためといえよう。いわば、国教会体制の下で温存されていた聖職者階級による宗教的知識の半独占的状态に風穴が開けられ、一般の人びとが自分たちの創意で、それらの知識を使用するという状況が大衆レベルで生まれたのである。もちろん、これは18世紀になって突然生じてきたわけではなく、遡れば14世紀のロラード派を嚆矢として17世紀のピューリタンたちに至るまで、宗教的覚醒を覚えた人びとが彼らだけによる共同体を構築しており、さらに民衆的レベルではクエーカーの出現のように民衆の世界への

「福音」の下降、浸透は確実に進行していた。しかし、私は、これらの動きはごく限られたものであり、それらが民衆の間で大規模に展開するのは、ウェスレーとメソヂズムの登場を待たなければならなかったと考えている。ウェスレーは、野外での説教で回心した人びとに聖書や神学的著作を通じてキリスト教の基本的知識を授け、そのなかで特に優れた資質を備える者を説教者に抜擢し、彼の代理人としての役割を与えた。組織の基底部に位置するクラスでは、つい先日まで飲んだり喧嘩をしていた人びとが回心体験によって「真人間」になってクラス・リーダーに任命され、同じクラスに属する人びとの信仰に助言を与えるという役割を演ずることもあった。いわば、ウェスレーの臨機応変な措置によって巧みに作り上げられることになった階層的組織秩序は、一般大衆が自らのイニシアティブで宗教的資源を利用、応用する仕組みに他ならなかったのである。ウェスレーの宗教体験の強調や賛美歌の積極的な利用を通じて、キリスト教の福音は、古い魔術の信仰圏に微睡んでいた一般大衆の宗教世界のなかへと着実に下降、浸透することになったのである。後述する分派の二人の指導者たちの視界のなかに、メソヂストの説教者やその出版物がつねに見え隠れしているという事実は、まさにこうした状況を如実に物語っているといえるのである。

さて、以上のような視点を念頭におきながら、この二つの分派の指導者が示している特徴をいくつか検討してみよう。まず、彼らがどのような社会層の出身者であったのかを中心に二人の指導者のプロフィールを簡単に紹介してみよう。プリミティブ・メソヂストの創設者の一人、ヒュー・ボーン(Hugh Bourne)は、1772年、4月3日にスタフォードシャー、ストック・オン・トレントのフォード・ヘイズで生まれた。彼の父親ジョセフは農業とともに、車大工、材木商を営んでおり、彼も若い頃は材木関係の仕事に従事していたようである。一方、バイブル・クリスチャンズの創設者ウィリアム・オブライアン(William O'Bryan)は、1778年2月6日にコンウォール中部のラクシリヤンで生まれた。彼の父親と祖父は錫採掘と農業を手広く営んでおり、経済的には豊かだったように思われる。父親が亡くなるまで、近郊の大都市セント・アーセルの服地屋に徒弟として働いており、両親の期待は商売の道に入ることだったかもしれない。このように、両者はともに、ロンドンから遠く離れた辺境地域で、中流程度の事業者の家庭に生まれており、A・ギルバートが

指摘した、メソヂイズムへの参加に親和性を有している自立性の高い社会階層に属していたといえよう<sup>9</sup>。若い頃からともに家業を手伝い、教育水準は初等教育レベルに留まっていたと想像されるが、当時の基準からすれば十分な程度だったと考えられる。

次いで彼らの宗教的背景をみてみると、ともに宗教的な環境のなかで育ったことが窺われる。ボーンの両親は国教会に属しており、父親は大の非国教徒嫌い、母親エレンは敬虔な信仰の持ち主だったとされる。一方、オブライアンの両親はメソヂストだった。ただ、彼の父親はもともと国教会の教区の有力者で、母方もこの地域の有力なクエーカーの家系に連なっていたという。オブライアンは幼い頃から絵を書いたり読書をしたりと、非常に多彩な才能の持ち主であつたらしい。こうした豊かな感受性は、当然のことながら宗教的方面にも発揮され、わずか 11 歳の時に、メソヂストの説教者の話を聞いて、神の深い慈愛が彼を圧倒するのを感じ、罪の赦しを求める体験をしたという<sup>10</sup>。

ボーンの方はどうだろうか。もう少し細かく、その宗教的内面を覗いてみよう<sup>11</sup>。彼は、4、5歳の頃から天国と地獄がどのようなところなのかを思い悩み、地獄での悪魔の拷問の恐ろしさに身震いしていたという。神から罰を受けるのではないかという強い不安感から、7歳で深い罪意識をいだくよう

<sup>9</sup> Alan D. Gilbert, *Religion and Society in Industrial England: Church, Chapel and Social Change 1740-1914* (Longman, 1976), pp.59-68.

<sup>10</sup> ここでのオブライアンのライフヒストリーについては以下の資料を参考にした。

William O'Bryan, "Rise and Progress of the Connexion of People Called Arminia Bible Christians" in *Arminian Magazine*, vol.2-3, 1823-1824. FW Bourne, *The Bible Christians: Their Origins and History (1815-1900)* (Bible Christian Book Room, 1905). R.Pyke, *The Golden Chain* (London, n.d.). John Wilkinson, 'The Rise of Other Methodist Traditions', *A History of the Methodist Church in Great Britain*, vol.2, pp.294-303 (Epworth Press, 1978). Thomas Shaw, *The Bible Christians 180-1907* (Epworth Press, 1965).

<sup>11</sup> ボーンの生涯については、以下のものに負うところが多い。John Walford, (ed. by the Rev. W. Antliff), *Memoirs of the Life and Labours of the late venerable Hugh Bourne*, 2 vols. (1856, rep. 1999). John T. Wilkinson, *Hugh Bourne 1772-1852* (London, 1952), Leonard Brown, "The Origins of Primitive Methodism", *Proceedings of the Wesleyan Historical Society*, 34, 1964.

になった。その直接のきっかけは、労働の辛さから幼心にたてた誓いを守れなかったからだった。その誓いとは、重い石炭をもって小川を渡るのを神が助けてくれるならば両親とともに神を敬うというもので、神はその願いを叶えてくれたにもかかわらず、彼はその約束を果たせなかった。彼が接したピューリタンたちの著作も、罪人の地獄行きの確実さを印象づけた。こうした宗教的不安を抱えながら、ボーンはいろいろな書物を読み、自分が選ぶべき宗教について思い悩んでいた。幼い頃メソヂストの教会に行ったこともあったが、彼らについてそれほど知識があつたわけでもなかった。ただ、母親があるメソヂストから借りてきたウェスレーやフレッチャーなどの著作を熟読したり、クエーカーの著作にも親しんだりした。その頃、偶然にも『アルミニアン・マガジン』誌に掲載された不思議な話を讀んだ。そこにはこう書かれていた。ある船長が上陸した海岸で灰色の姿の男が火山の火口に走り込むところを目撃し、調べてみるとその男は彼の死んだ隣人であることがわかった。彼は地獄に墜ちたのだ、とその話は結んでいた。これを讀んだボーンの地獄への恐れは激しさを増し、一刻も早く救われたいとの思いが強まった。1799年の春、27歳のボーンは神からの赦しの声を聞く。彼は『日誌』に次のように書いている。

「ある日曜日の朝、私は読書をし、瞑想し、祈って信じようと努めていた。突然、世界がその臨在で満たされたように、主が私に現れ、内なる声が二度『汝の邪悪さは許された。汝の罪は贖われた』と告げるのを聞いた。光、生命、自由、幸福が私の魂のなかに流れ込み、あまりのうれしさに私はほとんど気絶するばかりだった。」<sup>12</sup>

同年、友人に誘われてメソヂストの愛餐式に出席し、そこでメソヂストになることが神の意志であることを確信し、ボーンはメソヂスト会に属することを決断したのである。

以上、二つの分派の指導者たちの社会層や宗教的背景についてごく簡単にみてきたわけだが、ボーンの回心体験に至るまでの宗教的模索に示されるように、そこには民衆的敬虔とも呼ぶべき宗教的環境のなかでキリスト教を自らの生き方の核心に据えようとした一般民衆の宗教的覚醒の様子が窺える。

<sup>12</sup> Wilkinson, *op.cit.*, p.26.

恐らく、18世紀以降の伝統的宗教構造の再編のなかから姿を現す能動的かつ自発的な民衆的宗教運動の指導者層は、ボーンやオブライアンのように、一般民衆のうちの経済的にも自立性が高く、一定程度の識字率を有する社会層から生まれてきたと考えられよう。彼らのように、自らの肉体を使った労働を通じて日々の糧を得ながらも、その生活に埋没せず心の平安を求めて精神的遍歴を繰り返した人々にとって、ウェスレーのキリスト教の受容は自らの確固たるアイデンティティを手に入れる大きな契機であったに違いない。そして、彼らの心の中に打ち込まれた超自然的な神への強い信仰は、彼らが後年の活動で発揮した自発性や能動性の源泉を形づくることになったのは想像に難くないのである。

### III 彼らの宗教世界

彼ら指導者たちの信仰実践における自発性、能動性を引き出したのは神への信仰であったが、同時に彼らの宗教世界には、超自然の世界に連なる様々な民衆的表象が登場していることがわかる。ここでは、それらについてもう少し具体的に紹介してみることにしよう。といっても、ボーン、オブライアンなどの指導者たちを除いて、初期のメンバーたちは彼らの信仰体験を含めたその宗教世界を書き残しているわけではなく、それらを詳細に描くことは困難である。こうした資料上の制約もあって、ここではボーンやオブライアン、さらにはプリミティブ・メソヂストの機関誌の記事を断片的に使うことになるが、そこに認められる特徴は、初期メソヂズムにも一貫して看取されるものといえる。この時期の説教者の数多くの伝記を丹念に検討したヘンリー・ラックは、彼ら説教者たちに共通して認められる全般的特徴を「超自然主義」(supernaturalism)と特徴づけている。そして、その具体的な中身として、(1)回心、(2)特別な摂理、(3)夢、(4)ヴィジョン、(5)宗教的癒し、(6)悪魔つきとエクソシズム、(7)亡霊出現、などを列挙している<sup>13</sup>。彼の整理はここで扱っている二つの分派に関するものではないが、19世紀メソヂズム

の状況全般を考慮すると、むしろ、こうした特徴は辺境の民衆に浸透したこれら分派の宗教世界にこそ妥当すると思われる。というのも、ウェスレー死後、母体組織が裕福な社会層との結びつきを強めていくにつれて、ウェスレー自身の『日誌』や初期の『アルミニアン・マガジン』誌の雑録にみられた「超自然主義」は背景に退くようになり、それに代わって、中産階級の嗜好に適合する上品で洗練された説教や著作が次々に出版されるようになってくる。しかし、初期の素朴な「超自然主義」は完全に姿を消したわけではなく、これら辺境の分派の一つがまさに自らを「プリミティブ」な「メソヂスト」と呼称したように、彼らの宗教世界へと受け継がれていったといえるからである。そこでは、亡霊、ヴィジョン、悪魔などの伝統的な民衆宗教的語彙は依然としてリアルなものとして存在していたわけである。ここでは、そのうち、「亡霊出現譚」、「悪魔の实在」についてごく簡単に紹介してみようと思う。

#### (1) 亡霊出現譚

まず、プリミティブ・メソヂストの機関誌である『メソヂスト・マガジン』誌に1826年に掲載された亡霊出現に関する記事を紹介してみよう<sup>14</sup>。この記事は、その話の真実性を高めるための工夫が行なわれている興味深いもので、N・ウェストというプリミティブ・メソヂストの説教者が他の数名とともに、知り合いの亡霊を目撃したマンという人物の話聞き、彼がそれを書面にしてマン自身が署名し、その内容をこの説教者たちが署名をもってさらに保証するという形式をとっている。これに加えて亡霊が実在の人物であり、マンとその弟も信頼できる人物であることをさらに6名が保証し、おまけに雑誌の編集者自身がその内容に注釈を加えるという手の込みようである。残念ながら、紙数の制約で全文を紹介することはできないので、ところどころ省略したり、大意を要約したりしながら、その内容をみてみよう。書面は次のように始まる。

「私ウィリアム・マンは、……ウィリアム・クラークソンが昨年刈り入れが始まった頃(つまり1825年)に亡くなったこと、そして、10月8日の

<sup>13</sup> Henry Rack, 'Dreams and Demons: Methodism and 'Popular Religion' in Eighteenth Century England' (unpublished draft, 1990).

<sup>14</sup> "An Appearance After Death", in A Methodist Magazine, 1826, pp.158-164.

晩の午後9時頃私の家とグルエル・ソープの間の狭い路地で私に亡霊となって現れたことを誓う。彼は私の横を通り過ぎ、私を見て微笑んだが、何も語らなかった。私は非常に驚いた。というのも、私はその亡霊が生前に私のところに下宿していたウィリアム・クラークソンその人であることがはっきりとわかったからである。この後、ほぼ一週間にわたって、一日おきに晩の12時半ごろやって来た。彼は時折微笑み、何かを話したそうにもみえた。」<sup>15</sup>

その後も、亡霊は頻繁にマンのもとに現れ、そのたびに硫黄の炎によく似た陰惨な光と共に出現したという。彼は心をかき乱され、すっかり食欲をなくして衰弱してしまう。ついにある晩、勇気をふりしぼって、亡霊に出現の理由を尋ねると、亡霊となったクラークソンはこう答える。

『私がやってくるのは、私の遺言が望んだようになっていないからだ。私の持ち物が今晚売りに出されるが、そこに行ってアンソニー・グランジ(この人物が彼の甥である)にできる限り販売を中止するように言ってくれ。今はこれ以上言うことはない。次の日曜日の晩の11時半にまた会おう。私はおまえから何かを奪わなければならない。というのも、しゃべらずに私を非常に長く待たせたからである。おまえの左の耳の聴力をいただくのがよいだろう。』彼がそう言うと、私の左の耳に何か音がした。するとすぐにそちら側の聴覚がなくなった。」<sup>16</sup>

この亡霊の恐ろしい仕打ちは、マンが亡霊に話しかけなかったからである。生者の側から話しかけなければ、亡霊はしゃべることができず、そのために彼は自らの思いを打ち明けられなかったからである。クラークソンが去る前に、マンは次に会うときには彼の弟を伴っても良いかと尋ね、許可される。約束の日、亡霊は現れ、自分が遺言を書かなかったばかりに、自分の遺産が思い通りに分配されなかったことを語った。そして、それからマンと亡霊との間で次のような問答が交わされて、書面は終わる。

「私は何をしたいのかと尋ねた。彼は、『もう遅すぎる。おまえは長い間私にしゃべらせなかった。』と語った。それで彼に魂が幸せかどうかを聞

いた。彼は『私は地獄に墮ちている。墮ちている。墮ちている。永遠に』と言った。

彼が地獄に墮ちた原因について尋ねた。彼はこう返答した。『私は自分自身の良き業を信頼した。しかし、もしおまえの弟アンソニー[マンの弟]の忠告を聞いていれば、救われていたかもしれない。』それから、私はグルエル・ソープの亡くなったある人が幸せかどうか尋ねた。彼は言った。『彼は私の仲間だ。』そして付け加えて『おまえも気をつけないと、私の仲間になるぞ。』……彼は私に他の多くのことを語ったが、それらについては語るなど命じた。弟アンソニーの話によれば、彼は15分ほど私を引き留めて会話をかわした。私の弟アンソニーは目の届く範囲にずっといた。

私は、まもなく私を裁く全能の神に、上述の話が実際に真実であることを誓う。

署名 ウィリアム・マン」<sup>17</sup>

この不思議な物語について、すでに述べたように雑誌の編集者からの詳細な注釈がつけられている。それによると、ウィリアム・クラークソンは元農夫であり、失明したことから農業を辞めて、ベットとテーブルを除いて自分の持ち物を処分し、マンの家の下宿していた。病気になってベットから起きあがれなくなった時に遺言状を書き直そうとしたが、果たせずに死んでしまったという。また、マンが亡霊に消息を尋ねたもう一人の人物について、こう解説している。「この特定の人物はかつて宗教に詳しい人物で、ある宗教協会に参加していた。そしてある報告によると、天国への見込みがあった。彼が信仰を失った原因は酒である。酩酊による発作で死んだ。彼は、ウィリアム・クラークソンが死ぬ前の冬に死んだ。信仰を失った酔っぱらい！神にまみえる準備をせよ。」<sup>18</sup>

## (2) 悪魔の実在

亡霊の出現以上に、彼らの世界にもっとも頻繁に登場するのが悪魔である。

<sup>15</sup> Ibid., p.158.

<sup>16</sup> Ibid., pp.159-160.

<sup>17</sup> Ibid., pp.161-162.

<sup>18</sup> Ibid., p.161.

それは伝道の途上に現れたり、突然とり憑かれたりする存在であり、ある意味ではもっとも身近な表象だった。若きオブライアンも、悪魔が立ち上がった大きな熊のように彼の後をついてくるのを感じたという<sup>19</sup>。不思議な気配を悪魔とみなすのは、彼だけではない。ある女性説教者は、数マイル離れた場所で説教するために、夜道を一人で歩いていると、彼女の脇を何かが一緒に歩いているのを感じた。それは2マイルほど一緒に動き、彼女が目的地に着く前に消えた。彼女が来るのを待っていた人々のなかには、それを彼女を守るためのなんらかの存在であるという人もいたが、彼女は、彼女を驚かすために悪魔が派遣した使いであると信じていた<sup>20</sup>。

悪魔を感じたのは説教者ばかりではなかった。それは普通の人々にとっても身近であり、それに突然とり憑かれることもあった。例えば 1821 年に、バイブル・クリスチャンズのヒュー・クロッカーがシェビアのレイクチャペルで語った話はこういうものである。ある日、市場から家に帰るときに、突然動けなくなってしまった。しばらくそこに立っていたが、どうしても前と右に行くことができず、左にだけ行くことができた。それで左に行き、ようやくあるところまでやって来た。ここで川を渡ろうとしたが、足が濡れると思いき、橋まで戻ってその半分あたりまでくると、先ほどと同じように動けなくなった。手すりに手をかけるとそれが壊れ、水の中に落ち、ごく短い間意識を失っていたという。その後、クロッカーは、J・ソーン[初期の指導者の一人]に出会い、彼に「悪魔が今晚ずっと自分についてまわっている」と語ったという<sup>21</sup>。

さらにまた、当時のエリート世界にとって夢物語に過ぎなかった魔女の力も、彼らには伝道の途上に会おう極めてリアルなものであった。ボーンは、彼の同志であるウィリアム・クルーズに触れて『日誌』に次のように記している。

「私はクルーズを訪れた。彼はラムザで出会った女性にひどく悩まされていた。私は彼女が魔女だと思った。教父たちがイエス・キリストの下に仕える働き手の頭たちであるように、魔女たちはサタンの下に仕える働き手の頭

たちである。それで我々はその戦いに没頭した。魔女たちは最初に教父たちと戦って初めてキリストの小さき働き手たちを傷つけることができる。彼らはジェームズ・クロウフット[メソヂストの地方説教者]に対して交戦しているように思われた。というのも、彼は悪戦苦闘しながら魔術をかけられた女性とともに、またそのためにずっと祈っているからである。」<sup>22</sup>

#### IV 「魔術の衰退」へのもう一つの道筋

さて、これらの体験をどのように解釈すべきだろうか。まず亡霊出現譚であるが、この種の話は、トーマスとその著作の一章を割いたように、イギリスの民衆宗教史においてはおなじみのテーマであり、ウェスレー自身、その『日誌』や『アルミニアン・マガジン』誌で取り上げた、初期メソヂズムにとっても決して珍しくない話題だった。伝統的な出現譚は亡霊自身が出現の理由を明かすことが定番となっているが、ここに紹介した話もそのパターンを踏襲していることがわかる。しかも、出現の理由として遺産相続をめぐるものが少なからず存在するというトーマスの指摘を踏まえると、ここでの話は、19世紀初頭においてさえも、17世紀前半頃までによくみられたものが残存し、それを反復しているようにもみえる。

しかし、そうとばかりいえない点もある。そこには、亡霊出現という伝統的な形式を借りながらも、それを新たな視点から解釈し直すといえる側面が存在するからである。トーマスによれば、亡霊出現の理由の背後には、多くの場合、生者の側になんらかの不正行為があり、それを死者が亡霊となって告発するという、いわば社会的正義や秩序の侵犯とその回復という大きな目的があるとされる<sup>23</sup>。しかし、クラークソンの亡霊は彼の思い通りに財産が分配されていなかったことを気にかけて出現しているが、そこには生者の側での不正と思われるほどのものはなく、むしろ生きていた時にしておけば良かった悔恨がこの世に亡霊となって出てきた大きな理由となっている。ここでは亡霊出現が担っていた共同体を支える社会的正義と秩序への志向性が抜

<sup>19</sup> Shaw, op.cit., p.78.

<sup>20</sup> Bourne, op.cit., p.52.

<sup>21</sup> O'Bryan, op.cit., vol.3 Feb.no.2, 1824, pp.69-79.

<sup>22</sup> Wilkinson, op.cit., p.80.

<sup>23</sup> Thomas, op.cit., p.719.

け落ち、個人的悔恨が前面に出ているようにみえるのである。つまり、この話は、伝統的亡霊譚にみられる社会的秩序の回復などの共同体的志向性よりも、地獄の實在とその恐ろしさを強調し、それを避けるために必要な信仰の重要性を説くことに目的があったと考えられるわけである。少なくとも、マンの話を書いてこの文書を聞き書きした説教者が「それを読むすべての人々に効果的な警告となることを望んでいる」と冒頭で書いており、この話を掲載した雑誌の編集者の意図も、その注釈からも明らかのように、この雑誌を読んだ読者に対する、ある種の脅迫を含んだ信仰の勧めということになる。したがって、この記事からは、彼ら民衆的世界において亡霊の出現という古い民衆宗教的語彙が 19 世紀においても一定程度の意味を有していたことが窺えるとともに、そこに亡霊という伝統的な民衆宗教的イデオロギを使用しながらも、その出現譚を信仰の放棄が招く恐るべき帰結を示唆する話へと再解釈しようとする意図が感じられるのである。

さて、もう一つの悪魔の實在の話に移ろう。この種の話は亡霊出現譚以上に、しばしばお目にかかるもので、悪魔憑きになった人間から祈りによってその悪魔を解放するというテーマは聖書に記述されたイエスの行為に象徴されるように、キリスト教ではお馴染みのものであり、ウェスレーの『日誌』にも登場するエピソードである。しかし、ここで注意しなければならないのは、彼らは身近に悪魔の存在を感じ、身体的な異変や不思議な出来事を魔女などの民衆宗教的な語彙によって説明しようとするが、それは単なる古い魔術の世界からのものではないということである。彼らのこうした二重性は、例えば、一般民衆が、ボーンやオブライアンたちの集会で頻発する身体的な痙攣や回心による人格上の大きな変化を魔術的な行為とみなし、かえって彼らを魔女的な存在として迫害したという事実に端的に表現されているだろう。オブライアンは、次のような憑依したある女性の奇妙な言動が引き起こした出来事を書いている。

「まもなく、彼女は憑きものが憑いたような奇妙な様子で連れて来られた。非常に多くの隣人たちが彼女を見にやって来た。彼女は彼らにまったく奇妙なことをしゃべり、その他にも、彼女はキリストであって、彼らは教会に行かなければならない、等々と語った。人々は、驚き、宗教的な事柄に全般に無知なので、悪魔的なことと聖なるものと間の区別を見分けることができな

かった。それで、彼らは彼女の後を追って教会に行った。その数は 200 名ほどだったという。」<sup>24</sup>

この事件はすぐに収まるのだが、彼らの活動を快く思っていないある牧師がオブライアンの魔術で彼女がこうなったのだという噂をながした。彼はこう書いている。

「このために、多くの人々がわれわれへの憎悪を燃え上がらせた。そのため、罪人の罪の自覚、信者たちの回心が肉体的な作用が伴うと魔術であると告げられた。……真実の力で打ちのめされた罪人は、その言葉で跪いて、大声で神の恵みを求めて祈ることがある。そして、起きあがる前に平安を得ることが多い。別の場合には、歌ったり、祈ったりしている間に、信者たちは非常に幸せになり、神を大声で讃えざるを得なくなる。これもまた不思議であり、多くの人々にとってこれを魔術以外で説明することができない。それで魔術だという声が遠くまで駆けめぐるのである。」<sup>25</sup>

オブライアンのこの発言には、超自然的な出来事をめぐるとの二つの解釈が存在していることがわかる。一つは、そうした出来事を魔術に由来するものと理解し、そうした行いをする人物を魔女として迫害しようとする伝統的な態度と解釈である。いま一つは彼自身のもので、それらを神の超自然的な業の帰結とみなし、古い魔術と神の業とを区別するというものである。オブライアンのこの言葉だけから判断すれば、我々は、彼が自らの福音的キリスト教の立場とは全く係わりのないものとして、前者をキリスト教の福音を知らない無知で素朴な民衆のものとして受け取っているように感じるだろう。しかし、既に紹介した彼らの宗教世界全般を想起すれば、少なくとも、彼の世界は民衆的な古い魔術的それと全く切断されたものでなかったことが理解できよう。オブライアンが悪魔の存在を「立ち上がった熊」のようなものと実感したように、また、その信徒の一人が悪魔によって行動の自由を奪われたと信じたように、彼らは一般の民衆と同じように悪魔や亡霊が徘徊する民衆的宗教世界の語彙から自分の身の回りに起こる様々な不思議な出来事を理解しており、彼らが生きている世界は、魔女の存在をお伽噺だとする当時のエリートの宗

<sup>24</sup> O'Bryan, op.cit., June, no.6, 1824, pp.189—200.

<sup>25</sup> Ibid., vol.3, Aug. no.8, 1824, pp.263—4.



教的世界から遠く隔たっている。彼らの宗教世界は明らかに古い魔術的世界と連続する側面をもっているわけである。しかし、両世界は重なる部分もちながらも、異なる側面をもっていることも事実である。両世界では超自然的な出来事存在がともに肯定されているものの、その意味づけの仕方に大きな相違が認められる。回心体験に際して生じる激烈な身体的異変を魔術のせいだとする一般民衆にとって、魔術という表象は自分たちの頭では理解できない不思議な出来事を納得するための便利でランダムな説明原理にすぎない。いわば、それは説明できないものをすべて放り込むブラックボックスなのである。一方、オブライアンやボーンにとって、魔女や魔術は不思議な出来事を説明するための単に便利な表象ではない。それらは生きた力であるとともに、回心の場で生じる様々な身体的異変を真に起せしめている絶対的な神の力の助力によって打ち勝つべき邪悪な力として理解される。つまり、魔術は、人間の力では如何ともしがたい不幸に襲われた際に持ち出される諦念と同義ではなく、先に紹介したクルーズが記したように、「悪戦苦闘しながらも、魔術をかけられた女性とともに」祈ることで、その力から解き放たれることが可能な存在として認識される。別の言い方をすれば、古い魔術は、神の絶対的力というコンテキストになかで、操作可能な対象として再解釈されたといえよう。

彼らが再解釈を施したのは古い民衆宗教的語彙ばかりではない。それは、伝統的な民衆的祝祭空間にも及んでいた。その代表的なものが、プリミティブ・メソヂストが開催したキャンプ・ミーティングであろう。その詳細については別のところで書いたが<sup>26</sup>、ボーンたちはキャンプ・ミーティングを、民衆の伝統的祝祭であった「ウェイク」に取って代わる新たな祝祭空間に仕立て上げようとした。教区教会の献堂記念日を祝う祝祭であったウェイクでは、過食や痛飲、レスリングやボクシングなど多くの民衆的な娯楽が行われ、彼らの生活サイクルを規定する大きな行事であった。この祝祭の時期に重ねて、ボーンたちは、彼らが受け入れたウェスレーのキリスト教への回心を喜び、それを他の人々とも分かち合おうとする新たな祝祭を野外で作り出そう

としたのである。ここにも、先に指摘した彼らの再解釈の営みを認めることができる。春や秋の収穫期に野外で大規模に行われていたウェイクという民衆的祝祭に対置させて、それを彼らが体験的に実感した神への信頼のもとに捉え直し、参加者たちが自発的、主体的に運営する野外でのキリスト教の伝道集会という代替的祝祭を編み出したわけである。ボーンたちの創意工夫による新たな祭りの創出は彼ら独自の新たな生活様式の創出に他ならず、そこには超自然主義に基づきながらも、自らの「独創力を信ずる姿勢」の存在を容易に認めることができるように思われるのである。

## V 結びにかえて

私は、本稿において、17世紀までの古い魔術の衰退と新たな精神的態度の誕生に関するトーマスの展望を踏まえて、19世紀初頭に成立した二つのメソヂズム分派の宗教世界に焦点をあわせながら、この時期までの民衆的宗教における古い魔術と新たな態度の形成について彼とは少し異なった道筋を考えてみようとして試みてきた。

18世紀のウェスレーたちの信仰復興運動を受け継いで、それを辺境地域へと拡大したこれら19世紀の分派は、魔女、亡霊、悪魔、妖精など雑多な信仰や儀礼が依然として意味をもっていた民衆的宗教世界のもとに、あらためてキリスト教の福音を下降、浸透させることで、彼らの宗教世界を大きく変化させた。恐らく、彼らの古い魔術からの離脱の理由に関する一つの解釈は、B・セメルが指摘したウェスレーのキリスト教に認められる合理的で近代的な性格に求めるというものであろう<sup>27</sup>。しかし、私はここで、その世界がどのように変化したのかを考える場合に、民衆的宗教世界と彼らのキリスト教の世界との連続性の側面を強調し、いわば、二つの分派における両世界の重層性に注目したわけである。彼らの宗教世界において、亡霊や悪魔などの伝統的な民衆的宗教表象は呪術的なものとして一方的に否定されたわけではなく、場合によっては重なりながら並存していたようにもみえるからである。例えば、この重なり合いを、元説教者ジョセフ・バーカーは、その自伝的な

<sup>26</sup> 山中弘「プリミティブ・メソヂストと民衆的福音主義の展開」鎌田繁・市川裕編『聖典と人間』（大明堂、1998年）、105-122頁

<sup>27</sup> B.Semmel, *The Methodist Revolution* (New York: Basic Books, 1977).

かで敬虔なメソヂストだった両親に触れてこう書いている。

「私の両親は他の迷信と並んで魔術と妖精の信者でもあった。彼らは、人間、特に特定の女性の中には、悪意や悪魔的影響力によって、人間と家畜を病気にしたり、その他の様々な点で人々を悩ましたり傷つけたりする力をもっている者がいると信じていた。私は、魔術によって友人の R・A 某のビールに起きた被害についての奇妙な話を父親が語ってくれたことを覚えている。……同様に、ある女性のクラス・リーダーはかつて魔術をかけられたと思い、ある時など……魔術の話でその町の大部分を不安と混乱の中に投げ込んだ」<sup>28</sup>。

しかし、すでに述べたように、彼らはこうした古い魔術的世界の住民でありながらも、同時に、ウェスレーのキリスト教を自ら生活の根本指針としていた。バーカーの次のような言葉は、彼の両親にとって、古い信仰と新しい信仰とがどのような関係にあったのかを示してくれる。「それでも、彼らの神への信仰が、魔女や妖精への信仰を超越していた。確かに、彼らは自分たちの子供の頃の迷信にこだわるほど愚かではあったが、その宗教的信仰こそ、一般的に言って、彼らの生活を律する大原則だった」<sup>29</sup>。彼のこうした言葉は、彼らの宗教世界が本論で検討してきたそれと極めて類似したものであることを意味している。そこには、民衆的宗教世界との連続性と並んで、「神への信仰が魔女や妖精への信仰を超越していた」という言葉が示すように、その世界の内側からそれを離脱しようとする方向性がはっきりと認められるわけである。

最後に、古い呪術からの離脱の道筋についての私なりの見通しについて少し述べて、本稿の結びとしたい。私は、19世紀イギリスの農村や辺境に浸透した、メソヂズム分派のキリスト教の受容は、制御不能な力として民衆宗教的コンテクストに埋め込まれていた魔術という観念を、彼らが体験した神の絶対性というコンテクストの中に再定位することで、人間の側で制御できる力として受け取り直す回路を開いたのではないかと考えている。というのも、こうした態度は、間接的にであったにしても、魔女や亡霊などの超自然

的力を統制できるという、人間の能力への信頼を育んだように思われるからである。もちろん、それは超越的な神の助力を前提にしているという意味で自律的主体という近代的観念とはかけ離れている。あくまでも、それは超自然主義に支えられている。しかし、すべてを可能にする神の超自然的力を体験的に信じることは、結果的に、病気や自然災害など人間や家畜を不意に襲った災難を魔術のせいだとして諦めるのではなく、それらを神の意志だと解釈することで、そうした状況に耐えながらそれらを改善していくという態度、つまりトーマスが指摘した「人間の能力を信じる態度」という近代的心性の醸成に与ったのではないかということである。彼らの伝統的世界からの決別のあり方は、ウェーバーがピューリタンたちに認めた、救済を求めるあらゆるこの世的行為を呪術的だとするラディカルな超越主義でも、理性のもとに超自然主義的世界の存在そのものを否定する近代的な合理性にもとづくものでもない。むしろ、そのあり方は、古い魔術の世界をその内部に含み込みながらも、神の絶対的力への信頼という信仰に基づいて自らの自発的で主体的な宗教実践を重ねていくなかで、それらを内側から徐々に空洞化させていくようなものだったのではないかと考えてみたいのである。

(筑波大学助教授)

<sup>28</sup> Joseph Barker, *The Life of Joseph Barker* (London, 1870), pp.19–20.

<sup>29</sup> Barker, *op.cit.*, p.22.